（様式第1号）

研究No.（記載不要）	17 －学長－ 9

平成17年度配分　研究成果の概要

研究名	シンポジウム：The Time and the Space in Art 「非日常的な時空間の創造－古典と現代－入れ子の構造から」				
配分を受けた特別研究費	学長特別研究費　5，000　千円				
研究者氏名（代表者）	学部名	学科名	職	氏　名	共同研究の場合の分担
	文化政策	芸術文化	助教授	梅若　猶彦	企画責任者 戯曲の脚本／演出
共同研究者	文化政策	芸術文化大学院	教授 研究科長	深井　晃子	リレートークの構成と司会
	文化政策	芸術文化	学科長	平野　昭	シンポジウム開催の挨拶
	文化政策	芸術文化	教授	扇田　昭彦	シンポジウムのパネリスト
	文化政策	芸術文化	教授	伊藤　裕夫	顧問、映像撮影
	文化政策	芸術文化	教授	大山　千賀子	現代劇に使用する映像製作
	文化政策	芸術文化	助教授	谷川　眞美	顧問
	文化政策	芸術文化	助教授	片桐　弥生	顧問、実務のアドバイス

発表の方法（予定で可）	1　紀　要	号　数	第　　号 （　年　　月発行）
	2　学会等での発表 学会等名：	発表日（発表予定日）	平成　年　月　日
	3　その他 発表の方法：リレーシンポジウム及び現代劇の開催 平成18年1月28日（土）原宿クエストホール 第1部　リレーシンポジウム 「歪（いびつ）な時空間への招待」 第2部　現代劇 「喫茶店のなかの非日常」	発表日（発表予定日）	平成18年1月28日

注：配分を受けた翌年度の6月末までに提出

（研究の目的と趣意）

「空間とは」という所謂真理を探求しようとした命題は、半ば保留されつつ、比喩的に言えばですが、答えのないままの概念のみが様々な分野においてキャンバスとして使用された経緯があります。換言すれば、空間は理解する以前に使用できるものであり、そこに関わる作業や操作（観念的な操作も含む）は、空間の本質論に先行するものだとも言えます。そもそも空間の本質論を問うこと自体が寧ろ時代遅れだとする考えもあり、それは光の本質を問うことと似ているかもしれません。

科学者は空間というキャンバスに「実験」という絵を描きますが、しかし、その逆、つまり画家であるレンブラントの芸術性は科学者の実験のようにキャンバスに絵を描くことにあった、とは厳密には言えません。彼の光学の知識にも拘らずです。

その理由は、科学者の絵は客観的な空間の法則のなかで解が求められるのに対して、画家の絵は二つの空間、つまり客観的な空間と主観的な空間の両方の法則から、あるいはそれらの和合から解を求めようとしているところにあるからです。アプリオリな空間論（悟性の形式）はその時代の知性の極限のように思えましたが、カテゴリー論とともにそれは固定観念化し、我々はいまだに二つの空間（客観の空間と主観の空間）にさらされているとも言えます。

その一方、空間が社会学的に捉えられはじめてから空間は複数性（レーモン ルフェーブル的な意味での貨幣経済の空間、イデオロギーの空間、権力の空間、等々）として解釈されてもいます。また数学の分野においても、よく耳にするN次元の空間は理論的にNを100次元とすることも可とのことですが、厳密には5次元以上の数式からは解は期待できないそうです。

このリレーシンポジウムが「空間とは」（或は「時間とは」）という冒頭の問いを問い直す機会になればと思っています。

単一性の空間（客観と主観という意味では二つだが）は複数性(multiplicity)へ、線的な時間は非線的(non-linear)なものとなり、無秩序ではありませんが歪な秩序法則が現代の時空間だといえるかもしれません。と言っても昔から真理の探求は、この二つの概念を意図的に歪（いびつ）に扱うことによって始まったのであり、何も最近のことでないのは承知しているつもりです。

室町時代の能役者、世阿弥（1363ー1444？）は複式夢幻能を多く書きましたが、そこで扱われている空間は、知覚と約束事を歪に絡めたパフォーマンス用のキャンバスだったといえるでしょう。もう一方の時間軸も、能においては多くのフラッシュバックによって、ぶつ切りになっており、それとともに夢という形式（？）の執拗なる導入によって時間軸は当初から時系列的ではありませんでした。

このリレーシンポジウムでは各分野の専門家に独自の時空間論を展開してもらうことにある。
また招待者を充実されることにより、本学の芸術文化学科の存在を、更に認知してもらうこともこの企画の最重要な課題であった。

（研究の実施方法等）

リレーシンポジウム及び現代劇の公演 ： 平成 18 年1月 28 日（土）原宿クエストホール

第1部 リレーシンポジウム:*歪（いびつ）な時空間への招待*

開　　催:午後5時、終了午後6時
挨　　拶: 平野 昭（芸術文化学科 学科長）
パネリスト: コシノ ジュンコ （ファッションデザイナー） 「題・・・未定」
加賀 乙彦 （小説家） 「小説における歪な時空間」
西村 朗 （作曲家） 「歪な宇宙音響」

第2部:現代劇「*喫茶店のなかの非日常*」

開催:午後6時20から7時20時まで
作 ／演出:梅若 猶彦、衣装:コシノ ジュンコ、映像:大山 千賀子、選曲:佐藤 慶子
出演: 美加理 （女優）、吉村 七重（琴奏者）、梅若 猶彦、梅若 猶巴（能楽師）
西田 亜美（芸術文化学科3年）、北嶋 覚子（芸術文化学科3年） 他

（得られた成果等）

シンポジウムと現代劇は大成功に終わった。各界から有力者を招待したが、この企画を激賞してもらったといっても過言ではない。

また、TBS の「人間とは何か」の番組の予告編としてオンエアーとなった。